

た、街路を見下しながら走るのには甚だ爽快である、然し意外の冷氣に餘儀なく階下に下りた、英國は緯度の上から觀るに我が國の九州よりも北に當るが暖流の御蔭で暖かいのだと云ふ事は聞て居るが今更ながら氣温の差がだいぶある事を直覺した、繁華の中心に出て夕食をする、繁華の中心と云ふのは後聞くにヒカデリー邊であつたらしい、四月末日神戶を出立以來此處に四十有餘日、思へば随分永い航海を無事に終り始めて大陸の土を踏み、又多年出合はなかつた南君に接した悦は一寸想像が出来ない、猶下宿には偶然にも自分より約一ヶ月先に出られた京都帝國大學文科助教授植村清之助氏並に昨年末着英の東京大學文學部助教授今井氏が居られ兩氏共歴史家であるので自分に取つては何より愉快であり、翌日からは植村氏の厚意で大英博物館

(渡歐日記完結)

地理教材としての地形圖 (十)

甲山長津高原の南縁

主要地圖 五萬分一地形圖 赴戰嶺(洪原六號)
參照地圖及文書 朝鮮二十萬分一 洪原、五萬分一 新興(洪原七號)
立岩巖、咸鏡南道咸興地方の地質、朝鮮鑛業會議第八卷第一號(大正十四年三月)
小田内通敏、朝鮮の火田民、朝鮮部落調査報告第一冊(大正十三年三月)

地理教材としての地形圖

を始め市内を見物する。ロンドンには世界の大都市である、萬事に付て大規模な町である、ロンドンがどんな處であるか、如何なる方針で進む可きかは之れから二三日の見物では到底活す事は出来ない。

要するに歐洲航路は如何にも永い航路で旅客に取つてはつまらない航海である、然かし一方から觀るに此の航路は沿岸航海で寄航地が多いし、其の寄航地が舊大陸の東西に渡つて文化の異つた地方であり、殊に世界文化の發祥地をも見訪ふ事が出来るので有益な事は一通でない、此の方面に興味を有する自分等には一層の感想を興えた、西比利亞の道は今後回復すとも一度は通過しなければならぬのは此の航路であるを愉快に思つた。

朝鮮北部國境地方即ち咸北、咸南、平北に互る小藤博士の蓋馬山地と呼んだ山地は一帶に高原性を帯びて居るが殊に其の中部である咸南の^{ウツシ}甲山、豐山、長津、新興各郡地方は立派な高原性を現はして居て、この部分を特に甲山長津高

原と名付けたい。小藤先生に従つて幾多の人が南方に急斜した此の高原の南縁の地形に注意した。

西方平北より東走し來つた妙香山脈の主脈は甲山長津高原の南縁を成すのであつて海拔千七百米から二千米を超えて居る。この山嶺以北は高原の胴體面であつて鴨綠江の流域に屬し一般に北に緩斜して山邱の凹凸はあるが局部には甚だ平凡な波狀面を示して居り、縁邊に近い南部では谷地は淺く平かで且其高さは一千米以上に達して居る。高原の南側より望見すれば天を壓する一大障壁の觀ある山稜も高原上から見れば逶迤たる丘陵に過ぎない。

甲山長津高原の南側は急に低くて一般に二十度内外の急傾斜を有し、地勢峻峻で突兀たる山峰や深いV字形の谷に富んで居る。而して此の急斜面を過ぎれば南方は咸興の城川江や北青の南大川等の廣き河谷に下り、高原の縁邊より六十軒にして日本海の岸に達するのである。

城川江、南大川等の河谷及海岸は人口に富み

殊に咸興の平野に於て然りである。之に反し高原上には針葉樹の森林が廣く、殆んど米の產することなく火田(内地の燒畑)に播種さるゝ燕麥又は粟を產するのみで谷地はたゞ咸興長津間、北青甲山間の道路に沿うてのみ集落の點綴するのみで一般には民居は山地に散在してゐる。而して九月には降雪を見ると云ふ此の高原上の人文は甚だ原始的であつて、運搬用としては牛馬に挽かせるバルクォーと稱する簡單な櫓や、輻のない木の圓盤を車輪とした荷車や、丸木舟が日常使用されて居る。咸興附近で著しく大きな車輪の牛車を見た眼には其の餘りの急變に驚かされるのである。

甲山長津高原の南邊の地勢を一圖葉中に明亮に現はして居るのは五萬分一赴戰嶺圖幅である。恐く慙んなによく高原の縁邊の形狀を示して居る地形圖は他にないと思ふ。次に主として此の圖幅に就いて説明を加へやう。

甲山長津高原の一般の地質は灰色を呈した花崗片麻岩であるが、此地方も亦同様な先寒武利

亞代の花崗片麻岩から出来てゐた。赴戦嶺四近の小區域に後代の噴出に係る雲閃花崗岩が出て居る。實際此の高原は古い時代の擾亂した岩石が或る比較的新しい地質時代に出来た平坦面を成して保持されて居るのである。圖幅の三分一を占めた下方部は高原の側面を示して居て高距離は甚だ密であり上方の三分二の部分では高距離の間は廣くて高原の平凡な地勢を表はして居る。此の兩部の界即ち高原の縁には東に明堂峯（一八〇九米一）、中央に白亦山（一八五五米五）、西に白巖山（一七四〇米五）がある。圖幅内で南方咸興方面から新興を経て此の障壁を登る主要な鞍部は圖幅の中央の赴戦嶺（一四四五米）である。赴戦嶺路は甲山長津高原に南から上る幹線ではなく寧ろ裏道である。幹線道路は西では咸興長津間の黃草嶺（一二〇〇米）と東では北青豐山間の厚峙嶺（二三三五米）である。今（以下新興圖幅參照）城川江の幅一軒半の谷野にある新興（一一〇米）を出で、北東に城川江に沿ひて其左岸を進むこと十軒、城川江を渡り慶興

里（山林監視所あり）に至つて本谷を辭し北に向ふ支谷を進めば左方の山地には針葉樹林を初めて見る。慶興里より七軒にして中興里に到れば谷は急に迫まり左右の山側は甚だ急峻で、V字形に深く抉ぐられた谷底に自分を見出すであらう。（以下赴戦嶺圖幅參照）遙に前方を見れば直立六百米の高原の側壁は恰も千古人跡を絶ちたる淨域を守護する那羅延金剛の如く屹立し、懦夫をして敢て進むを肯せさせまい。實際我等が立つこの路が果してあの障壁を上りゆく其路であるとは考へられない。中興里より四軒にして富田里の小集落あり、海拔約六百米、これより直徑三軒の間に約八百五十米を上らざるべからず、猶谷を北上して道は障壁の直下に至りて遂に西方の山嘴に路を探りて高原縁邊の絶壁を登攀するの苦を避けなければならぬ、既にして障壁より南に分れた山嘴に上れば人は千百米の高距にありて餘す所其の三分一に足らず、奮然として山嘴の頂を上れば終に赴戦嶺上に立つこととなる。高原へ上つた人々の經驗する様に低

い方への眺望の快はあつても或は苦勞して上れば其の前途に横はる俊邁な狀態に接するだらうといふ期待に叛いて平凡な老朽面を見且つ其上に立つた時の感じは裏切られた者の不快を感じずには居られない。

進んで高原上の地形を檢覈する前に高原の縁邊が其の胴體の方に退いて行くことに就いて地形上の考察をして見たい。一般に高原の縁は後退しつゝある。朝鮮地質調査所の立岩技師は其の好き一例を我が赴戰嶺圖幅中に見出された。

前記の白巖山の西北西の高原上に退水洞と記された民居のある處がある。その南方の一戸の火田民家の附近を見よ。高原上を北流した一溪水は急斜面を南から削削しゆく若き力強き谷が北に延びた爲めに途中から切られて其の源頭は南の谷に屬する者となつて了つたのを明示して居る。こゝでは明かに六百米だけ分水界即ち高原の縁邊が北退したことを表はして居る。かう云ふ高原の蝕磨に依る後退は京都四近の開析高原の縁邊に於ても其の例を甚だ多く氣付いて居

る。實にこの事は如何なる高原でも其の縁邊の地形を注視さへすれば直に見出すことの出来る當然で且つ普通の事實であるのである。

甲山長津高原の南側の急斜してゐることの私に執つての最も深い何時までも腦裏から消えない印象は次の挿話である。甲山から捷路を咸興へ或る冬の初めに雪の中を抜けた時である。赴戰嶺の東方二千^{ブルグリオン}籽の之と同じ様に高原の南縁である火蟻嶺(一六三二米)を通つたが嶺上に出て南へ下る道があるまで高原の縁を少しく東に傳はなければならなかつた。高原上で今まで緩かな地勢に馴れた私の荷を負つた馬は油斷をして足をすべらし急斜面の方に横さまに轉回しながら落ちた。一行の驚きは少なからなかつたが折よく大きな樹に支えられて頂から五六十尺の邊で馬は鞍と荷とを曲がりはしたものの放さずに止まつた。私共は荷をはずして馬をもとの高原の縁邊に牽きあげるのに小半餉の苦勞をした。外側から削られゆく高原の縁邊は地形として平衡を保つたものではなくて人爲的に物を裂

き割つたと同様に不自然なものであることの好き例とも思つて自分のつまらぬ経験をこゝに書いて見たのである。

高原上の形態を見るべく赴戦嶺からこの淋しい其でも秋は爽快な、太い木を剔つた家根よりも高い溫燐^{オシロイ}の烟出しから緩く紫煙の靜に立つ高原を進んで見やう。一步赴戦嶺を北に行けばそこは太古の森林である。路上の泉水里や天火時の民居が戸數の割合に廣き火田を持つとを圖上の地物界で見ることが出来る。北に緩斜地を下ると長津江の一支、寧ろ姉妹川である赴戦江の上流の谷地に下る。谷地ではあるが海拔千二百八十米に達する。地形圖に示されて居る様に赴戦江の川沿ひは濕地であつて黒い土の沮洳たる地には短かい草が株をなして生えるばかりで一度此中に足を踏入れると足は數寸泥土の中に没入すると同時に黒い水がヂクヂクと湧きあがるのである。故に道は川沿ひをよけて丘の縁を通じ、水泥のあまりに軟弱な處では止むを得ず丘のかなり上の方を通るのである。又廣い濕地を

横ざる場合には丸太を横に並べて、木道を造ることもある。感地院から北に赴戦江に沿うて下つてゆく圖上に元豐里の憲兵出張所が註記されて居るが、現今では警察官駐在所となつてゐることと思ふ。警官たちはかゝる人家が數戸散在して居る處に廣い廣い管轄區域を持つて繁華な日本の都市を種々に想像しながら其の任務について居るのである。見よ元豐里附近の谷野の廣きことを、其の幅二軒に達し、然かも平地に一の田も畑もないことを。

赴戦嶺より元豐里に至る約十六軒の道路に沿うて人家を見ることは三十に満たないのである。再び眼を轉じて赴戦江西側なる新成里の邱陵式山地を見れば點々と人家があつて且つ森林の間に廣き耕地が區劃されてある。赴戦江畔の平地と比すれば新成里に人家の甚だ多いのは著しいことである。是れ皆火田民である。地籍の未だに確定してをらぬ火田住民が如何に廣大なる土地を心の向くがまゝに占用したか圖上でよく窺ふことが出来る。赴戦嶺圖幅を去つて猶

北上するも同じ狀態が地形と民居との上に見られる。唯其處には達阿^{ムラタ}崎や漢堡里の砂金採取地があつて特種の山中集落を作り其の一部の人家は下半部は土中にありて外見は恰かも侏儒の住居の如き低き家を見出すのを異とする。

本篇に於て如何にしてこの面白き高原が成りしやの地形成因上の問題に觸れなかつた。小藤博士は南落の斷層の爲めに出来たとされた。然し立岩氏の地質調査の結果は高原の南側に東西に走る何等の高原成生に對する斷層の存在をも地質學上實證することが出来なかつた。多くの大地形を支配する構造線が地質學上證明されないのは現在の地形を以て地質構造線を假想するの甚だ危険なのを證據立てゝ居ると同時に我等は深甚の調査と考察とを地形の成因に對して行はなければならぬことを痛感させられる。甲山長津高原の成因に就いては須臾く後日の研鑽に譲り、茲に之が新しき假想論を提出して直に憂慮される自己否定に陷るの苦を嘗める愚を敢てせぬであらう。

私は赴戰嶺を通る機會を失した。本篇は西の黃草嶺と東の火嶺とを過ぎ、赴戰嶺圖幅北隣の廣大里圖幅内を跋渉した過去の經驗を基礎とし、立岩氏の報告に依つて赴戰嶺圖幅のマツプリーディングを試みたものに過ぎないことを御断りする。

(中村)

第二回地球講習會概況

第二回講習會は地方誌を主題として豫定の様に四月一日から京都で開催された。賛加團員の智識慾を充分に満たしたい希望で講話は豫定の五つに加へて山上大阪外國語學校教授の「關領印度の世界的位置」及び石川京都帝國大學講師の「北海道及九州の炭田に就いて」の徹底した御話しがあつた。出席團員は七十六名を數へ、第一回に比し丁度學年初めであつた爲めに賛同者がいくらか減じはしたもの、賛加團員は多大の熱心を以て臨講された。殊に地球同人の欣喜に堪へないのは藤浪醫學部教授と水路部長植村少將とが團員と共に等しく講演を御聽話になつたのである。講習會は五日に行はれた東山、伏見方面と向日町、山崎方面との二班に分れた實地地理學見學で名殘惜しく閉ぢられた。猶ほ會期中には小川教授の吉田山丘頂に於ける實地指導が特にあり、又豫定の如く烏津及上野兩製作所への見學が催された。此の機會に兩製作所が懇切に團員を迎へられたのを御禮する。猶ほ近き將來に地學の基礎である地質學諸分科を主題とした第三回地球講習會を催すべき計劃のあるのを報導する。